

2 キュウリ産地の活性化に向けた取組み

■ JA香川県中央地区キュウリ生産者 ■

(東讃農業改良普及センター 黒川領太)

●対象の概要

県中央部に位置する高松市と三木町は、水稻作を中心とする園芸作物との複合経営が多く営まれている地域である。

野菜類では、イチゴ、トマト、キュウリ、アスパラガスなどの施設野菜のほか、ナバナ、ブロッコリー、オクラ、ネギなどの露地野菜が栽培されている。中でもキュウリ栽培の歴史は古く「夏秋きゅうり」「冬春きゅうり」の指定産地にもなっている。

●課題を取り上げた理由

キュウリは重量作物であり、多くの労働力が必要となる。そのため、当地域でも生産者の高齢化の進展とともに栽培面積が減少しており、平成17年に10.1haあった栽培面積が平成21年には7.7haまで減少した。その後も栽培面積は減少傾向にあり、このまま減少を続けた場合、産地の維持や販売ロットの確保に大きな影響が出る懸念されていた。

また、平成18年に当地域で初めて確認されたキュウリ黄化えそ病(MYSV)やキュウリモザイク病(ZYMV)などのウイルス病の発生によって生産性の低下も課題となっていた。

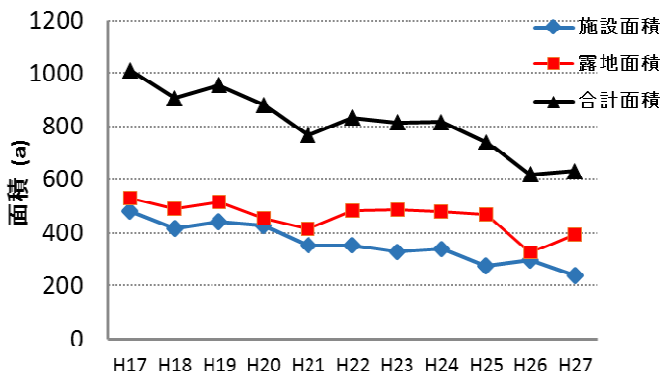


図-1 キュウリ栽培面積の推移

そこで、産地の維持と活性化を図るため、今後の産地を支える新規栽培者の確保対策とウイルス病の防除対策の普及が重要であると考え、以下の普及活動を行った。

●普及活動の経過

1 新規栽培者の確保

1) 就農相談における提案と誘導

キュウリは比較的取り組み易い露地栽培でも800千円/10aの所得が見込まれ、他の露地品目と比較しても収益性が高い品目である。年2～3作の栽培と冬場の露地野菜との組み合わせにより、比較的安定的な農業経営が可能であり、体力のある若い新規栽培者向けの品目と考えられる。そこで、新規就農希望者に対して就農相談を行う際には、普及センターの新規就農担当と野菜担当が協力して県が作成した「認定就農者が目指す効率的安定的な農業経営の基本的指標」に示されている「露地キュウリ+ナバナ」の営農モデル体系の提案や誘導を行った。

2 ウイルス病の適正防除技術の普及

病害虫防除所やJA香川県中央地区営農センターと連携してキュウリ黄化えそ病およびキュウリモザイク病(ZYMV)の発生状況調査を定期的に行った。また、これらのウイルス病についてはアザミウマ類やアブラムシ類などの昆虫によって媒介されるため、地域としての防除対策が重要であることから、地域ごとに講習会を開催し、防除対策の周知・徹底を行った。

1) キュウリ黄化えそ病の防除対策

キュウリ黄化えそ病はミナミキイロアザミウマが媒介するため、講習会によりハウスでの越冬防止対策や薬剤感受性検定に基づく防除対策の徹底などについて各生産者に周知した。



キュウリ黄化えそ病の発生状況

また、病害発生農家に対しては、重点的に個別指導を行った。

2) キュウリモザイク病(ZYMV)の防除対策

キュウリモザイク病(ZYMV)はアブラムシ類が媒介するため、定植時の粒剤施用の徹底などによるアブラムシ類の切れ目のない防除対策について重点的に指導を行った。

さらに、新農薬効果確認展示および現地試験により高い効果が得られた弱毒ウイルス(キューピオZY-02)について防除効果を周知するとともに、ワクチン接種苗導入について普及を図った。



キュウリモザイク病(ZYMV)の発生状況

●普及活動の成果

1 新規栽培者の確保

就農相談における提案や誘導、また、JA香川県の新規栽培や面積拡大の際に必要な資材の購入費の助成などの結果、平成27年は6名が新規にキュウリ栽培を開始した。これにより減少を続けていた栽培面積の低下に歯止めがかかった。

2 ウイルス病の被害軽減

1) キュウリ黄化えそ病の被害軽減

媒介昆虫であるミナミキイロアザミウマの徹底防除について指導を行った結果、産地全体での防除意識が高まり、ミナミキイロアザミウマの発生が見られなくなったことから、平成25年以降はキュウリ黄化えそ病の多発農家はみられていない。

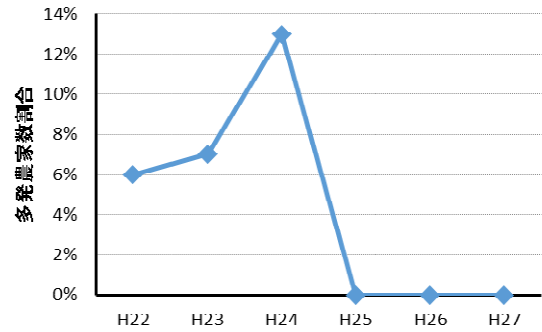


図-2 キュウリ黄色化えそ病発生の推移

2) キュウリモザイク病(ZYMV)の被害軽減

弱毒ウイルス(キューピオZY-02)のワクチン接種苗の普及を図ったところ、病害発生が問題となる夏および秋の作型についてはすべてワクチン接種苗の導入が図られた。

その結果、ワクチン接種苗の本格的な導入が始まった平成23年以降、キュウリモザイク病(ZYMV)の多発ほ場はみられていない。

なお、JA香川県ではワクチン接種苗の導入に際し、ワクチン接種費用の助成を行っている。

●今後の普及活動の課題

1 新規栽培者の確保

引き続き新規就農担当と連携し、新規就農希望者に対してキュウリ栽培の提案を行う。また、新規栽培希望者にもわかりやすいパンフレットなど栽培推進資料を作成するとともに、新規栽培希望者を対象とした説明会や講習会を開催し、さらに幅広く新規栽培者を確保する必要がある。

2 ウイルス病対策

キュウリ黄化えそ病については当地域では発生が見られなくなったが、県内にはいまだ多発している地域がある。このため当地域にも再発する可能性があることから、引き続き、防除対策の徹底に努めていく必要がある。

また、キュウリモザイク病(ZYMV)についてはこれまで発生が見られなかったハウス抑制の作型でも一部で発生が確認されたことから、ワクチン接種苗の導入を図るとともに、他の作型においても発生状況を確認していく必要がある。さらに、各種苗メーカーで耐病性品種が育成されているため、今後、地域に適応した品種の比較試験を行い、導入を検討する必要がある。